

刃物産地の活性化、日本の伝統工芸の継承

経済学部 経済学科 箱田 昌平

この体験学習は日本の伝統的な打刃物産地を訪ねて、打刃物の製造技術が高度な加工技能を必要とし、その技術が産地の徒弟制度によって、現在まで継承されてきたことを理解することである。このために、まずは打刃物の工場見学をして実際に、伝統工芸士の話をききながら打刃物の作業を体験することが企画されている。次に、こうした伝統技術が崩壊して、産地に大きな影響が表れていることを見学することである。さらに、どうしたら、こうした技能が継承されて産地が活性化するかを各自が考えることが目的である。

この体験学習では6月に三木を12月に武生を訪問した。以下、参加者の主要な三木のレポートと武生のレポートが掲載されている。体験学習に協力していただいた大学のスタッフと各産地の伝統工芸士および関係者の方の方々に感謝申し上げます。特に、三木では伝統工芸士仲一真氏には三木で見学コースのアレンジと自工場を見学させていただいた。また、武生では増谷浩氏に協力いただいた。増谷氏には龍泉刃物の職人さんを学生の研磨作業の指導する手配をしていただいた。

Ⅰ 三木の打刃物産地の見学

6月7日（土）三木の体験学習を実施しました。日程は以下のような内容である。

集合：阪急茨木市駅 8：30、JR 茨木駅 8：40
10：00 金物会館、古式鍛練見学
10：45 伝統工芸士3名のお話
12：00 湯の山街道自由散策
13：30 伝統工芸士仲氏の工場見学
15：00 道の駅の打刃物展示館見学
14：00 帰路へ

■目的と意義

日本には鎌等の農機具、生活用具の包丁やはさみ及び大工道具の様な打刃物を作る技術が脈々と受け継がれている。これに対して量産される抜刃物が安価に生産されるようになり、伝統的な刃物生産の技術が崩壊しつつある。生物の多様性と同じように1つの生物が絶滅すると、生態系

に重要な影響があり、私たちの生活にも大きな影響がある。打刃物の技術が失われると、日本のモノづくりにも大きな影響が生じるであろう。

今回の産地見学では、日本の最大の大工道具の産地の三木を見学することで、こうした現実を理解することが目的である。三木の伝統工芸士の多くの方の協力により、中でも鋸職人、伝統工芸士仲氏の協力により、有意義な体験をすることができた。古式鍛練の後にかの有名な伝統工芸士千代鶴氏、井之上氏のお話をじかに聞くことができた。学生たちは仲氏を含めた三人のお話には深く感動していた。工業協同組合からは1名ずつ肥後守をお土産としていただいた。深く感謝いたします。

以下参加した学生の体験記のほんの一部を載せます。紙幅の関係で多くの体験記を載せることができませんでしたが、別に体験記は作りたいと考えています。



写真：古式鍛練の風景

① 打刃物の町・三木を訪問して

経済学研究科 谷川 佳子

■はじめに

兵庫県三木市は秀吉の時代から金物、とくに打刃物の生産地として名高い城下町で、湯の山街道沿いにいろいろな商業が栄えたまちである。そこには現在も数百年来の伝統工法を受け継ぐ鍛冶職人が工房を開いて生産を続けているが、終戦直後の全盛期に 800 軒あった手工業の工房は今は 10 軒ほどになっているという。平成 21 年 6 月 7 日、この三木市を訪問し、湯の山街道沿いの商店街、古式鍛錬の実演、金物資料館、鋸工房、道の駅・金物展示即売を見学し、伝統工芸士の方々からお話を伺う機会を得た。生産効率と廉価が競われ、生産の機械化、既製品の輸入がすすむなか、伝統産業のまち・三木市はどのように生き残ろうとしているか、そこに働く人々はどのように考え、伝統を受け継ごうとしているか、このフィールドワークで学んだことをまとめてみたい。そして、このまちの未来の可能性、不可避の現実を考察してみたい。

■ 1. 金物の町三木の歴史と現在

三木市は大和朝廷の時代から、和鍛冶職人と、渡来した韓鍛冶職人とが交わりながら技術を発達させてきた地といわれ、羽柴秀吉治世の時代以来打刃物の名産地として現在に至った町である。戦の時代には刀剣、平時には農具、大工、左官道具の生産が繁栄し、鍛冶仲間、金物問屋仲間も組織され、遠く江戸にも流通ルートをもって三木金物としてひろまった。江戸時代までは原材料は砂鉄、たたら製法で製錬された鋼であった。明治時代以降は、西洋からの輸入鉄鋼を使った生産がはじまり、刃物、日用金物以外にも戦地で使われるスコップなどの生産が近代的工場でなされるようになった。しかし、第二次大戦終結までは伝統工法による刀鍛冶も盛んに行われ、刀工として名を残した鍛冶職人もいる。現在も機械生産とならんで、古式鍛錬での生産が伝統工芸士らによって続けられている。鉋、鋸、鋳、鑿、小刀などの刃物（経済産業大臣により「播州三木打刃物」として「伝統的工芸品」に指定されている）を中心とする金物は全国シェアの約 6 割を占める。それらの工匠具は三木市の工業生産の 32%を占めるが、工場のうち約 80%は従業員 9 名以下の小規模工場で、多品種少量生産でニーズにこたえる生産をしている。

伝統的技術を守る取り組みとして、三木金物古式鍛錬技術保存会により、毎月一回古式鍛錬の実演が金物神社にて行われ、神社に隣接して昭和 51 年に建てられた三木市立金物資料館には、古くから伝わる製法や金物製品が常設展示されており、三木の伝統的な技術、製品を守る努力が続けられている。

■ 2. 湯の山街道沿いの観光キャンペーン

神戸電鉄粟生線・上の丸駅の西側に「ナメラ商店街」が伸び、昔ながらの小売店や手作り、懐古をテーマにした今風の店が軒を連ねている。駅東側には湯の山街道沿いに伝統建築のすがたを今に残す酒蔵、打刃物工房、問屋などが立ち並び、歴史街道のたたずまいを守っている。金物の町、としてだけではなく、観光の町として市をあげて町おこしに取り組んでいることが垣間見られた。

この日は、レトロ軽三輪自動車の実物を昭和を懐かしむコンセプトで作られた休憩所「昭和カフェ」前の路上をステージにして展示し、観光客と交流するという催しがおこなわれており、人々の関心を引いていた。その前には地場産の黒米の米粉を使って焼いたパンを売る店が出ていて、人気を博していた。鋸をかたどった「鋸クッキー」も売られていた。

また、旧街道では、杉玉をつるした白い土塀の酒造が、土間を開け放して道行く人々を呼び込んで試飲をすすめ、地酒の即売も行ってた。

■ 3. 古式鍛錬の実演—鉋の部

毎月第一日曜日に、金物神社の境内にある古式鍛錬上にて三木金物古式鍛錬技術保存会主催の実演会が午前 10 時から午後 1 時まで行われる。鋸部会、鉋部会、鋳部会、小刀部会、鑿部会があり、およそ年に 2 回ずつ順番で実演を担当することになっているそうである。この日は鉋部会の実演日で、鉋鍛冶職人たちが胴衣に鉢巻き姿で、古式にならって轡を操る役、鋼を挟み細長い火床に入れ、焼けた鋼を台に載せ押さえる役、鋸で打つ役、を交代しながら観客の前でとりおこなっていた。汗をぬぐいながら、火花を身に受けながらのハードな共同作業である。伝統工芸士である 80 代半ばの今井重信氏、60 代後半の二代目千代鶴貞秀・神吉岩雄氏、20～30 代の若い弟子たちという 3 世代の共演であった。

この情景からはそれぞれの工場の技が次世代に継承されていることが見て取れたのだが、著名な鉋匠・千代鶴貞秀氏の話によると、実は彼のただ一人の弟子であり三代目を継ぐ若者は、他府県出身の I ターン組で現在修行を始めて 6 年目ということであった。「伝統工芸士」という名をもらったとしてもそれで収入が保証されるわけではない。修行には非常に長い年月がかかり、その間収入もなく、仮に修行を全うし襲名、のれん分けが許されたとしても時代のニーズに左右され、満足した生活が成り立つかどうか不安な職業である。子が親に弟子入りし、跡目を継ぐのが当たり前だった親たちの時代とは違い、親としても子に継がせることができず、また他所からの弟子を迎えることもなく今日に至った工房もあるようだ。現に 16 名の伝統工芸士のうち、鉋部会の長老・今井氏 (80 代)、鋸部会の井之上氏 (80 代)、仲氏 (60 代) など 8 名には後継者がいない、ということであった。

「伝統工芸士」という名が与えられても、後継者が育ちにくい事実が、他の産業と同様に、現

在の日本の文化に対する価値観、経済、産業構造を反映していると思われた。

■ 4. 金物資料館

金物神社の境内続きにあるこの資料館は、昭和 49 年、地元の企業小林ギムネ製作所社長・小林恒美氏から 3000 万円の寄付金が寄せられたことを契機に建てられた三木金物の歴史、伝統製法、製品を伝承することを目的として建てられた博物館である。たくさんの金物が、製造過程に使われる各種道具とともに解説展示されており、大変興味深い。用途によってそれぞれ微妙に違う種類の刃物があり、その繊細さ、種類の多さは驚嘆に値する。しかし重要なことは、いかにたくさんの種類の製品があるか、ということよりも、むしろそれらが人の手によってどのようなプロセスで作られるのか、ということ、すなわち博物館では展示しきれない「技術」の存在である。

金物資料館では、鉋鍛冶の千代鶴貞秀氏、鋸鍛冶の井之上博夫氏、仲一真氏に講話をいただいた。千代鶴貞秀氏は、職人の技は、磨かれた勘であること、それは数ミクロンの差を見分ける人間の目であり、感じわかる手である。しかし鍛冶職人の社会的評価は低く特に大工道具の鍛冶屋は身分が低い。現代のコンピューター技術でも 700 年前の刀を復元することができない、というくらい手仕事の技術は高いものである、と手と勘が鍛冶技術の土台であることを話された。

仲氏は「自分が何げなく日常で使う金物は誰がどのようにつくったものか、値段だけでなくそういうことにも思いを馳せてみてほしい」と強調された。あらゆる物には原材料がある。その原材料は道具によって得られる。仲氏の作る鋸は生木を伐採、剪定するためのものであり、彼の刃物を使って大工が加工する材木が収穫され製材される。一方、大工・指もの師専用の鋸鍛冶・井之上氏は、「乾いた材を切る目の細かい薄い導突鋸では、生木は切れない。道具は適材適所で用いられて 120% の効率を発揮する」「替え歯が普及して使い捨ての 1000 円の刃物のほうが 10 万円のよりよく切れる、ということもあるけれども」と語られた。適材適所。材料が最適の場面に用いられて最高の活躍をするように、刃物も最適の材に対し、最適の技術をもって使われることで、最高の製品を生み出すということだ。しかし、大工がこうした手作りのいい道具を使う場が少なくなってきたという。また、当初はよく切れるが、歯がこぼれたら目立てができないような刃物もたくさん生産されている。彼らの打刃物は、目立て職人との共同で完成される。手入れを繰り返す、刃物自体が摩耗してなくなってしまうまで、弟子のそのまた弟子の代まで使い続けられるような製品である。機械がどれほど高度化して精度が高まっても、彼らが仕上げる鋸をそれらが凌ぐことができるだろうか。

講話の後は、伝統工芸士の方々に直々にガイドをしていただき、鞆のなりたちや風を送るメカニズム、数々の刃物の種類や名称、用途、機械化される前、どのように鋸の目を切っていたか、などについて学ぶことができた。海外でも名高い日本の刃物とはどのような伝統工芸であるかを理解するためにたいへん役に立つ貴重な博物館であった。

■ 5. 仲一真さんの工房

仲さんのご厚意で、ご自宅にある鍛冶場を見学させていただいた。農業も営んでおられ、材料や製品を置く離れの倉庫、そして古い農家造りの母屋に隣接した納屋にある鍛冶場でお話を聞いた。高校を卒業してから企業に勤め、その後お父さんに弟子入りして鍛冶職人となられた。「作るだけでなく、問屋に認められ納品していくという個人営業は大変である」、「直接使い手の声を聞くことはないが、問屋に厳しく鍛えられて一人前になっていった」、「効率、スピードが要求される時代に、常に在庫を揃えておくことを信条にしている」、「息子はいるが後を継ぐことはない」、といったお話をうかがった。

そのほか、刃物が完成した後につける柄や、刃物の鞘（塗りもの的高级品もあった）、ビニールカバーなど、さまざまな付属品を見せていただいたあと、ご自宅に隣接する工房に案内していただいた。

鍛冶場は二つあり、いずれも天井の低い、薄暗い小屋で、油と金属の匂いに満ちていた。ひとつの部屋は機械で目を落とす作業場で、仲さんは私たちのために、歯を切るためのダイヤモンドほどの堅さの鋼でできた円盤歯が回転する左右対称の機械を一台ずつ作動させて、歯を落とす様子を見せてくださった。一台が自動車一台分くらいの価格だそうである。片面を落としたあと、裏返してもう片面の目を落としていく。かつては金物資料館にあったように一つ一つの目を型を当ててハンマーで打ち抜いて落としていたそうだが、現在は極めて精緻な設計の機械が流れるように動いて細かい目を落としていく。

薄暗い部屋に蛍光灯のスタンドが置いてある。この薄暗がりと蛍光灯の明りの中で出来上がった鋸の刃をかざすと刃のシルエットが浮かび上がる。それを凝視して刃のわずかなひずみを見極め、ひずみとりの打ち作業を繰り返して仕上げていくという。

ペーパーかけの機械は手指を巻き込む危険なものである。幾たびか事故もあったという。

狭い工房の中には、最終的に製品にされなかったとみえる鋸の歯がいくつも転がっている。完成品がたくさん反故のなかから生まれることも理解できた。手仕事と機械作業とのミックスは速さの点での効率はあげることだろうが、すべて手仕事だったころと比べ、商品にならない製品がたくさん出てくることも想像ができた。

原材料が安価に入る、機械化する、大量生産が可能になる。そうしたプロセスで全盛期を通じてきて、生木用の鋸の需要が激減している今、伝統工芸士・仲さんの仕事の後を継ぐ人はだれもいないという。もうじき70歳になる仲さんの10年後、この工房は博物館のようなだれも使わない鋸工房の遺跡となってしまうのだろうか、それとも、再び人の技術と機械の効率性が組み合わさった形で21世紀の鋸生産を担う場として次世代に引き継がれているのだろうか。

見学が終わり、暗い工房を出てからも刃物づくりのお話とどまることなくあふれ出る仲さんにお礼を述べ、鋸伝統工芸士の工房を後にした。

■ 6. 道の駅・金物展示即売所

国道 175 号線沿いにある道の駅みきは一階で地場の農産物、加工食品の販売、カフェ、2 階で金物の展示、即売をしている中規模の道の駅である。研修室もあり、集会所としても利用されているようである。ここでは、さきほど金物神社の古式鍛錬場や金物資料館でじっさいにお目にかかった打刃物の伝統工芸士の方々の製品が販売されている。その他大きい金物工業所での機械生産製品もたくさんある。数十万という銘の彫られた鉋から、ビニールパックに入った銘のない製品まで、地元で生産された製品がほとんどである。また国内の他所の名産金物も扱っている。見たこともない専門性の高い道具もたくさんある。

専門家でなくてもその品ぞろえの多さに、見て回るだけでも興味深く、時間を忘れるほどである。大工道具はとくに高価で、親方から弟子へと受け継がれていくそうだが、そんな製品を作っている伝統工芸士の中にも弟子が一人もいない方がおられる。なんとか 10 年、20 年後にもその技を伝えていけないものかと思うが、さまざまな理由で伝統工法で家を建てる大工が減り、今後も鉋、鉋、鑿など打刃物の需要がますます減れば、せっかく認定された伝統工芸士の後継ぎもなかなか現れないであろう。やはり産業構造を経済政策のレベルで考え直さなければ、この販売所も 10 年後今と同じコンセプトで続けていけるのかどうか疑問であった。

■ 7. 感想と考察

打刃物の町、三木。大工仕事をするものにとってはあこがれの町といえる三木は実に長い歴史を持つ人の暮らしに密着した町だった。城跡にある神社を中心に長く延びた旧街道は日曜日だったせいもあり、とてもにぎわっているとは言えなかったが、生活と歴史と生産が同居した昔懐かしい立派なたたずまいだった。古式鍛錬を実演されていた方々は実際に日々生産に携わっている本職であり、観光客へのアピールを目当てにしているとはいえ、技術保存のための苦心が感じられた。そこには親子孫三代にあたる年齢の刃物職人が集っていて、将来たのもしい感じもしたが、実際のところ後継者のいる工房のほうが少ないとのことだった。

商店さえも後継ぎに事欠く。ましてや伝統的な技術の後継者は、現在と将来に対し相当な覚悟を持たなければこの道に入ることはできない。千代鶴氏の弟子は他にもおられたようだが、最終的にはこの道を進むことは断念させて、別の進路を斡旋されたという。鉋職人井之上さん、仲さんには弟子がいない。三木の伝統工芸士 16 名のうち半数が弟子のない状態だそうだが、伝統工法の大工、刃物職人と常に共存している目立て職人も高齢化が進み後継者難に直面していることは想像に難くない。

行政は観光の町としても売り出そうと、ナメラ商店街の活性化に尽力し、若い人たちも引き付ける工夫をしているようであった。しかし、これからの時代、ほんとうに打刃物の技術が引き継がれ、製品が実用品として流通し、街が活性化するには、観光開発に力を注ぐだけでは不十分で

あると思われる。三木市は伝統打刃物産業振興のためにどのような施策を行っているのだろうか。

三木市のホームページによると、

1) 「ふるさと三木応援基金」

2) 伝統ある三木金物の製造技術を伝承する後継者を育成するため、伝統工芸士の後継者育成に対して支援を行う

という取り組みをしているとのことである。

1) のふるさと三木応援基金は、子育て、地域活性化、自然保護、文化、健康などの項目から自分が使ってほしいものを選んで募金するというものである。平成 21 年 5 月までで 2,499,000 円の募金があったそうだが、打刃物産業振興という項目があるわけではないので、どの程度具体的な後継者育成に使われているかは不明である。

2) の伝統工芸士の後継者育成支援は、市の農政課が金物業者協同組合との連携で平成 21 年は「技術伝承セミナー」を年に 10 回の予定で開くとのことである。予算はどこからどのくらいであるかはホームページでは発表されていない。

日本の産業構造が数十年前とはまったく違ってしまい、もはや打刃物の全盛期に戻ることが出来そうもない今、もし三木市に打刃物を今後も町の中心産業と位置づける意志が本当にあるのなら、伝統工芸士への道を目指す若者にしっかりと投資補助金を与えて、修業期間も含め経済的に生活が成り立つよう、税を投じる策を立てるべきである。現在の匠達が引退され、亡くなった後もその技がこの地で継承されるように取り組み始めるのは、市の財政からいっても容易ではないと思われるが、今なら遅すぎはしない。しかし、もう時間は十分に残されてはいない。上記の取り組みは、可能性は秘めているが、現実、現場のニーズに添えているとは思われない。

予算作りとしては、三木刃物の愛好者でその未来を大事に思う工務店や大工集団、原材料である鉄鋼業界など全国から基金を募り、同時に芸術系、工業系の専門学校、大学と連携し、学生にインターンシップ制度を利用して工房に研修に来る制度を作るとか、具体的な方策で予算と人材を集めることを市議会あるいは県議会も含めて議論していくことが望まれる。もちろん、すでに行われている「ふるさと三木応援基金」のなかに打刃物後継者育成という要件を特別に作り、ひろく一般市民に「三木刃物フォーエヴァープロジェクト」などと銘打って、一時的ではなく、なにか特典がついた先行投資型の継続的な資金支援として呼びかけていくのも一案である。

市役所の職員は地元出身の人間がほとんどであろう。なかには後を取らなかった伝統工芸士の子や孫・親戚もいるはずである。そういった人々が、故郷のために本気で企業と同じような R&D とビジネス精神で取り組めば、町はそのことで活性化するだろう。22 世紀へ三木刃物をつなごう、伝統刃物を使って手作りしよう、というローカルなキャンペーンは消費を促す可能性をもつ。そして同時に伝統工芸士の方たちも、考え方の切り替えをしていき、若い世代とのコミュニケーションをとおして弟子を育てる新しいノウハウを学ぶことで引退が遠のくことも考えられる。地方が

自発的に努力し、行動したとき、国も重い腰を上げ始めるかもしれない。

そして、今回の見学で知ったことに、作り手が問屋によって買い手、使い手とのコミュニケーションを阻まれている、という現実があった。流通システムに関しては、このような実態を改善し、購入、使用後のメンテナンスを重視して、ずっと摩耗するまで使ってもらい、砥ぎを請け負い、使えなくなれば次にまた購入してもらい、といった相互につながった生産者消費者の関係・システムをつくる必要があると思われた。それは、必ずしも問屋を解体する、ということではなく、問屋がもっと職人と消費者を積極的に仲人するようなサービスの仕方に経営を転換する、ということである。あるいは、工房からの直接販売を公然と認める、ということでもある。

また、製造業と目立て業とが別々というのはいちや無理で無駄なことではないかと思われる。時には刃物職人が出張目立て、というサービスも行うような、消費者の立場にたった、顔の見えぬ関係を築きなおしていくことも大切だろう。

次世代を担う職人は、職人肌だけではなく、ビジネス感覚も持ってコンピューターを駆使してサービス業へも堂々と参入していくことが望まれる。そうなったとき、伝統工芸士の工房の職員にはそういった販売、サービス部門の労働者が一緒に働くことになろう。それが家族であってもいいわけで、親子、夫妻で経営していくブランドが生まれて、子ども達も後継ぎになりやすくなるかもしれない。

このような策は、ひとり打刃物の三木にのみ必要とされているものではない。第一次産業はすべからず後継者不足と経営困難で瀕死である。三木は風光明媚で農業、観光、そして金物で自給自足できる可能性を持った街である。今回お目にかかった匠達が、あと 10 年後、達成感を持って引退されるように、三木市が今から取り組むことはたくさんあるように思われる。

■おわりに

人口約 82,000 人の三木市は、とてもどかな小さな町だった。その日が日曜日で、訪れたところが工場地域でなかったためであろう、昭和時代とあまり変わっていないような印象を受けた。しかし時代は移り変わっていて、戦中や戦後の特需で繁栄した町も、今は機械化、使い捨ての替え刃が主流となり伝統工芸は風前のともしびであった。

このままでは三木の打刃物は滅びるのを待つだけであろう。60 代から 80 代の鍛冶職人たちは健在ではあるが、その作業場、工程、流通方法、消費社会の現状から考えて、あと 10 年後、保護、助成なしに経済的に成り立つとは思えないほどそれはこの現代日本社会においてある意味時代錯誤な特殊な仕事だった。

金物産業自体が衰退することはあり得ないが、伝統工芸はこの日本の大量生産大量消費を是と

する価値観の中では、生き残る道はないといえるだろう。

一つの技術、産業の隆盛も衰退も、社会の価値観によって決められる。消費する人々の中に少々時間や費用が余計にかかっても良い職人の良い仕事・長持ちするものを選択しようという考えがなければ、どんなに優れた技術でも製品でも将来博物館の中で見学者に見物されるだけの「かざりもの」となる。

三木の打刃物は今後どのような道をたどるのであろうか。ここまで続いた数百年の歴史があと十数年で終焉を迎えるかもしれない、それが事実だとしたら、まさに現代という時代は、私たちが歴史の中で遭遇したことの無い特別な時代であるといえるかもしれない。連綿と続いた過去の歴史を断ち切るほどの近代化、機械化、省力化、労働形態の変化が起きている。

典型的な市場主義経済の中では三木の打刃物の歴史は幕を下ろすだろう。生き残る唯一の道は、目先の効率への投資ではなく、未来の可能性への投資を今、することである。

もし本当に三木の鍛冶技術が将来の日本や世界の経済活動や人々の暮らしに必要な不可欠な価値を持っているのなら、何らかの形で国民の税金を使って長期的な投資を行うことしか後継者を生み出すことはできないであろう。しかし、見落としてはいけないことは、三木の産業の再興は、国内の木造建築関連産業、造園業、製材業、林業、農業、木工業など、現在同様な後継者不足、伝統技術の継承の困難さを抱える多くの一次、二次産業の再興と分かちがたく結びついているということである。三木の鍛冶職人の未来は、日本の産業構造が現在の人間の手による仕事やその有用性を否定した機械化、効率最優先型産業システムからもっと人間中心の、質を重視するシステムに改革されるかどうかにかかっている。

後継者のいない匠達にこれからも頑張ってください、とは言えなかった。こちらが頑張って、産業構造改革の提言の土台となる研究をして、彼らと三木の歴史の未来を正の方向へ向けなければならぬ、そう感じながら三木の町をあとにした。

II 武生の打刃物産地の体験学習

日 程	12月12日(土曜日)
集合場所	阪急茨木市駅ロータリー
集合時間	8:30 遅刻厳禁
予定時間	11:20 武生ナイフビレッジ見学
	12:00 昼食(自己負担)
	12:45 1班 体験学習 ペーパーナイフ作製
	13:00 2班 打刃物会館見学、小刀作製
	14:00 1班 打刃物会館見学

15:00 帰路へ

18:00 阪急茨木市駅到着

以上のような日程で、体験学習を実施した。このような打刃物の産地を体験することはなかなか機会のないことで、特に今回の計画では実際に職人さんの協力によって刃物を作る体験をすることができた。また、前回の三木は違う産地の取り組みを見学することでした。特に、武生では三木以上に衰退の傾向が早くから現れていた。この産地ではこうした産地の活性化の試みを見学することができた。その試みは共同工房ともいうべきナイフピレッジである。県内外から弟子たちが各伝統工芸士についている。こうしたわかい弟子たちにじかに考えを聞くこともできた。また、打刃物会館では職人さんたちと和やかな対話の中で小刀の研ぎを体験することができた。帰路へのバスに乗り込む前に以下のような記念写真を撮った。職人さんたちは全員手を振ってお送りくださった。



写真：武生の職人さんと記念写真

① 武生の打刃物産地の体験学習をして

08EE210 三橋 亜衣

約700年の歴史を持ち、日本古来の鍛造技術を守り続け、昭和54年に打刃物業では初めて国の伝統的工芸品の指定を受けた越前打刃物の生産地である福井県武生市。

タケフナイフビレッジは平成5年に伝統技術と先進技術、現代デザインの融合を目指して設立されたもので、回廊から越前打刃物の一貫した製造工程を実際に見学出来るほか、製品の展示直売コーナーもありました。また、様々な体験教室など企画されていて、単に伝統と先進性を兼ね備えているというだけでなく、職人さんの顔が見えるオープンな姿にも地場産業を身近に感じることができました。

見学では、様々なナイフが飾ってあり、案内して下さった方もひとつひとつ細かく説明して下さいました。クイズなどを交えて説明して下さいるなど、ユニークさもとても面白かったです。また、実際に打刃物を作っておられるところも身近に見ることができ、昔からの伝統技能に触れることができました。

私はペーパーナイフ製作を体験したのですが、実際にやってみると思ったよりも筋力、体力をつかうことにとっても驚きました。また、紙を切るためのナイフを作るのに鉄鎚たたき、成形し、やすりがけをしたりとこんなにも行程があつてたいへんなことだと思いませんでした。しかし、出来上がってみると達成感があり、職人の方もこの達成感があるからこそ、伝統という形で今まで守り続けていられるのだと改めて感じました。

一般的に、伝統工芸品の産地活性化は、次のいずれかだといわれています。

- ・美術工芸品としての価値づけをめざす。
- ・美術工芸品としての地場体制づくりをめざす。

いま、伝統工芸品を伝統的に生産している場所はだんだんと少なくなってきました。しかし、このままでは伝統工芸品は日本からなくなってしまいます。そうならないためにも、このような地場産業を存続させ、いままです以上に日本国民に身近に感じられるものになってほしいと思いました。

② 武生ナイフビレッジ見学

08EE217 三好 瑛子

私は行く前に武生ナイフビレッジについて調べてみました。約700年前から日本古来の鍛造技術を続け、初めて国の伝統的工芸品の指定を受けた越前打刃物の生産地が福井県武生市でした。越前打刃物のシンボルは「こま犬」で、刀を造るたびにこま犬の木彫りを作り井戸に沈めていた

という伝説があるのです。それは刀が人を殺すための武器ではなく、武士の象徴としてあってほしいという願いが込められているからです。ナイフビレッジは職人さんが造っているところを間近に見ることが出来てその目的は地場産業の新しい可能性を広げるためだそうです。一つ一つハンドメイドで今の量産量販体制ではなく質の向上を目指しています。そして伝統的なモノにこだわりすぎるのではなく伝統的かつ現代的な商品も造っていて、ものづくりへの理解を得られるよう産地環境づくりを目指しているところなのです。私はナイフ造りが体験出来ると聞いてもっと興味がわいて行くのが楽しみで仕方ありませんでした。当日はバスに乗り3時間ほどで福井県に着きました。そしてお話を聞いて館内を見学しました。そこにはたくさんの種類の包丁があって驚きました。自分も一本くらいこんな素敵な包丁を持ってみたいと思いました。そしてナイフビレッジの近くにある「万葉園」で美味しい手打ちそばを頂きました。そこから私は待ちに待ったペーパーナイフ造りが体験できる場所に向かいました。銅板を渡されトンカチで叩き、自分の好きな形に切断して、ヤスリで削り特殊な液につけて色もつけ文字も刻印しました。初めての作業ばかりで戸惑いもありましたが、世界でただ一つの自分のペーパーナイフが出来て大満足です。ただの銅板が自分の手によってこんなナイフになったと思うとすべてが本当に貴重な体験でした。モノづくりの楽しさ大切さがすこし分かりました。そしてこの伝統工芸品を守り続けていってほしいと思ったし失ってははいけません。職人さんを目指す若い人が増えたらいいなと思いました。

③ 越前打刃物見学に関するレポート

09AG002 陳 春傑

武生市は美しく豊かな自然に包まれる福井県の中核都市である。そこで700年前から、職人たちが受け継がれている本物の技で作られている「越前打刃物」の産地である。

私は今回の見学を通じて「越前打刃物」の素晴らしさを知り、日本の伝統的職人たちの凄さを改めて認識した。職人氣質という言葉も初めて知った。「自分の技術を探求して、自信を持って、自分の意志を曲げたり妥協したりしない、いったん引き受けた仕事は利益を度外視しても、技術を尽くして仕上げる」という素晴らしい職人氣質は利益しか追求しない現代社会に吞まれて、残りはずかである。

しかし、こんな素晴らしい「越前打刃物」といった伝統的工芸品産業の厳しい現状に瀕していることも分かってきた。現代社会は機械生産の大規模化と技術革新によって、大量生産、大量消費の経済構造が確立して、規格化、標準化された低価格の生活用品が生産して供給され、伝統的工芸品のシェアを低下させていた。また、農村の衰退によって原材料の入手難、雇用環境の変化によって後継者の養成難、人手不足といった問題を抱えている。話によると、去年の金融危機と

円高で外国の需要が落ち込んでいて、国内需要も国民の生活用品に対する意識と生活様式の変化によって年々減っていくから、今年の売上は例年の三分の一に落ち込んでいた。伝統的工芸品産業は減りかけている状態に瀕している。

しかし、まだ諦めてはいけない。このような厳しい現状にあるものの、いくつかの明るい兆しが見られている。例えば、ゆとりと豊かさをもたらす質の高い製品を求めるニーズの高まり、地域独自の文化を見直そうとする風潮の高まり、欧米における「和」の生活様式に対する関心の高まりによって、今後の伝統的工芸品の需要の増加に繋がるかもしれない。伝統的工芸品の再生は国だけでなく、地方自治体も、労働組合も、国民も協力する。みんなの力を出し合って、この伝統的工芸品は受け継がれていく。